

一橋大学大学院言語社会研究科

L'École doctorale "Langues et Sociétés" - Université Hitotsubashi

国際シンポジウム Colloque international

エクリチュールと〈自己〉

テキストはいかにして生成するのか？

L'Écriture, le « moi » et la genèse du texte

立木康介 (京都大学) Kousuke TSUIKI

オートフィクションとしての理論 — フロイトのケース

Théorie comme autofiction — le cas Freud

ジャン=ニコラ・イルーズ (パリ第8大学) Jean-Nicolas ILLOUZ

「ロマン主義の百足」 — ジェラルド・ド・ネルヴァルの『オーレリア』

« Un mille-pattes romantique » : *Aurélia* de Gérard de Nerval

日時 2013年1月12日 (土) 13時より Le 12 janvier 2013 à partir de 13 h

場所 一橋大学 東キャンパス 国際研究館 4F 大教室 (中央線「国立」下車)

Université Hitotsubashi Campus-Est LS/CGE Building (Kokusai Kenkyu Kan)

4^e étage La grande salle (Dai-Kyoushitsu) (Kunitachi, La Ligne Chuo, JR)

連絡先 森本淳生 (一橋大学) atsuo.morimoto@r.hit-u.ac.jp

主催 科学研究費補助金・基盤研究(B)「生表象の動態構造——自伝、オート・フィクション、イフ・ヒストリー」

使用言語 フランス語／日本語通訳つき conférences en français avec la traduction japonaise

13:00～13:10 趣旨説明

13:10～14:50

立木康介 **オートフィクションとしての理論——フロイトのケース**

精神分析の誕生にフロイトの「自己分析」が深くかかわっていることはよく知られている。しかしフロイトは、精神分析の事実上のマニフェストである『夢判断』を出版したのちも、毎日一定の時間を「自己分析」に捧げていた。初期の「自己分析」がフリースという他者を相手に、パロールではなくエクリチュールによって進められていたことを考えれば、その後のフロイトの「自己分析」もまた、しばしば自らの弟子や読者を分析家の位置におきつつ、書くという行為をつうじて行われたと想像してみるができないだろうか。いいかえれば、フロイトのあらゆる著作が、じつは彼のたえまない「自己分析」の成果であるのかもしれないのである。このことは、精神分析の教え（*enseignement*）をめぐる永遠の問いと結びついている。それは、精神分析を教える者は分析家として教えるのか、それとも分析主体として教えるのか、という問いにほかならない。

*立木康介氏は京都大学人文科学研究所准教授。専門は精神分析（フロイト／ラカン）。主な著書に『精神分析の名著——フロイトから土井武郎まで』（編著、中公新書）、『精神分析と現実界——フロイト／ラカンの根本問題』（人文書院）、など。

14:50～15:20 質疑応答

15:50～17:50

ジャン=ニコラ・イルーズ **「ロマン主義の百足」——ジェラルド・ド・ネルヴァルの『オーレリア』**

『オーレリア』の冒頭で、ネルヴァルは、自分が書こうとしている「人間の心の研究」のための三つの「詩的モデル」を喚起している。アプレウス、ダンテ、スウェーデンボルクである。この精神的・文学的な三人の保証人のあいだに、ネルヴァルは弁証法的な関係を打ち立て、三つの時代（古代、中世、ロマン主義）、三つの宗教（古代ギリシア・ローマの宗教、キリスト教、光明思想）、三つの詩的様式（アプレウスに想を得た秘儀物語、ダンテの『新曲』に始まる精神的自伝、スウェーデンボルクに想を得、ネルヴァルが「超自然主義」と呼ぶものにおいてさらに展開される幻視文学）を総合しようとしたように思われる。

われわれが示したいのは次の点である。ネルヴァルは古典的模倣の形式にしたがって、自分が選んだモデルを模倣しているのではなく、それらをロマン化するのである。このロマン化はノヴァーリスが求めたものだが、ふたつの方法で理解できるだろう。一方でネルヴァルは、漸進的な普遍的文学の運動のなかで過去の作家を捉え直す。アプレウスからダンテ、ダンテからスウェーデンボルクへ、そして最後にはネルヴァル自身に至る流れである。他方で、歴史のなかで分離されてしまった種々の文学をのあいだに連続性を打ち立てるために、ネルヴァルはアプレウス、ダンテ、スウェーデンボルクの作品を文字通り再び生きなおし、ロマン主義美学が芸術の真の中心と認めた「無限な主観性」の中心において、これらの作家にもう一度、生を与えるのである。

ネルヴァルがこのようにして提示するのは、作品と生とのあいだの新しいかたちの結びつきである。これは自伝のみならず、「物語」や「幻視小説」を通して実現される。ここで「生固有の実質」が生を養っており、作品は逆に詩的真実によって生を照らし出すのだから。

*ジャン=ニコラ・イルーズ氏はパリ第8大学教授。専門は19世紀フランス文学。主な著書に、*Nerval, le "rêveur en prose" : imaginaire et écriture* (PUF)、*Le Symbolisme* (Livre de Poche)、など。

17:50～18:30 質疑応答